

November 2014

京都大学総合博物館 ニュースレター



国際シンポジウム「挑戦するアジアの大学博物館」を開催（7ページに関連記事）

企画展「学問の礎を受け継ぐ－文科大学陳列館からの出発－」.....	2
特別展「地の宝」.....	4
夏休み学習教室 体験 EXPO 2014' 夏	5
第2回京都大学－国立台湾大学シンポジウム.....	6
国際シンポジウム「挑戦するアジアの大学博物館」.....	7
研究員紹介	8
アジア4カ国の若手研究者を招へい.....	10
研究資源アーカイブ通信	11
総合博物館日誌（平成26年7月～10月）.....	11

平成 26 年度企画展

「学問の礎を受け継ぐ—文科大学陳列館からの出発—」

会期：2014 年 10 月 29 日（水）～11 月 30 日（日）

1914 年、京都帝国大学に、陳列館が誕生した。日本初の大学博物館である。大野照文館長より、陳列館の創設から 100 年目にあたる節目の年に、記念の展覧会を開催するよう指示があったのは、4 年ほど前だったと記憶する。

総合博物館の前身は、文学部博物館である。かつて文学部博物館の運営を担った文学研究科の考古・日本史・地理・東洋史・美術史の各専攻の教授陣に趣旨を説明し、文書館の参加も得て、最初の準備委員会を開催したのは、2013 年 1 月だった。それから 1 年半余り。すべての準備が終わった展示場に立って、安堵感でいっぱいである。というのも、100 年という長く深い学問の歴史を引き受けるには、担当者としては力不足で、正直押しつぶされそうだったからだ。頼りない事務局であっても、開催の日を迎えられたのは、委員の先生方の尽力の賜物である。まずはそのことに感謝したい。

展示は、文科大学陳列館から文学部博物館、そして、総合博物館へ、組織や建物がどのように変遷してきたのかをたどる歴史のコーナーと、収蔵品を展観するコーナーの二つから成る。歴史のコーナーは、文書館の西山伸教授が担当した。目玉は、和紙に描かれた美しい 5 枚の陳列館の設計図だ。レンガ造りの洋風建築。意匠を凝らした陳列館の姿が克明に描かれている。これらの存在を教示されたのは西山教授である。古い写真や公文書類も文書館から提供を受けたものだ。充実した歴史展示が可能となったのは、文書館の協力があればこそ。本学の文書館は、全国に先駆けて設置された大学文書館として知られるが、大学史の宝庫であることを改めて実感した。

収蔵品のコーナーは、委員会で議論を重ね、博物館の機能を、集める・深める・教える・伝える・守るという五つに分けて構成することが決まった。それぞれの機能に対して、各専攻で展示品を選定。いわゆるお宝から模型、写真まで、文科大学以来集積された、ありとあらゆる資料が並ぶことになった。40 万点を超える膨大な館蔵品からすればごく一部に過ぎないが、京

都における人文学研究の長い歴史を、モノがまさに物語る、不思議な空間ができあがった。

各専攻からあがってきた展示候補をみた時、これはすごい展示になると思った。重要文化財をはじめ、世界に唯一の鍍金されたチンギス汗聖旨牌や、今となっては入手困難な民族資料等々、豪華で貴重な品々であふれていたからだ。予算が限られた中で、文科大学設置以来たゆみなく続けられた収集と保全の努力の結晶というべきこれら実物資料こそが展示の主役と位置づけ、準備を進めてきた。しかし、すべてのケースに展示品を並べ終え全体を見渡したとき、不思議なことに目に飛び込んできたのは、模型や模本など、いわゆるコピー製品だった。



唐古・鍵遺跡出土直柄平鍬・斧膝柄とその模型・型

たとえば、唐古遺跡から出土した遺物の型とそれで作った模型。木製品は、発掘された瞬間から劣化が始まる。原形を残すために、その日のうちに実測を済ませ、翌日には大学に運搬。石膏で型をとり、模型を作り、現物に忠実に彩色する。一方、現物の方は、大型のガラス容器に入れて、ホルマリン水で満たし、原形維持をはかった。発掘以来 40 年以上にわたる定期的な水替えは大変な作業であったと聞くと、劣化を止める万全の策ではない。技術が進み、1980 年代に保存処理がなされたが、残念ながら出土した時の姿をとどめるものはほとんどない。展示ケースの中の、実物資料と型・

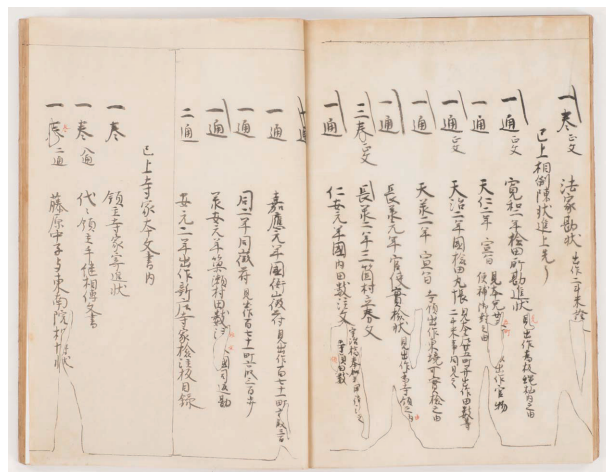
模型とを前にして、遺物を残すための創意工夫と熱意と、そして、そのために費やされたであろう多くの関係者の苦勞を思う。

そして、パルテノン神殿や大仙古墳の模型。日本の大学で最初に考古学講座を創始した濱田耕作（1881－1938）は、ヨーロッパ留学で研究・教育上における模型の重要性を学んだ。パルテノン神殿は、帰国後、濱田みづからが制作。大仙古墳は、宮内省から入手した陵基地形測量図をもとに、考古学研究室員に制作させたものである。形状を細部まで十分に理解しなければ、模型は作れない。遺跡の構造を知り、理解を深めるのに役だったことであろう。

美学美術史研究室からは、西域絵画が出陳された。東京美術学校出身の長谷川路可（1897－1967）が、唐代を中心とする西域壁画を模写したものの一部である。ヨーロッパ各地の博物館が収蔵する壁画の模写に付き添ったのは、文学部助教授澤村専太郎（1884－1930）。考古学的な資料として正確な模写が求められたため、直に作品に和紙を重ね、ときにめくって確かめ

ながら写し取るという方法が採用された。精密な模本は、現物を代替する貴重な研究資料だったのだ。

日本史研究室から出た影写本は、一般の目に触れることがほとんどない、一風変わった資料かもしれない。原文書に薄い紙をのせ、下から光を当てて、文字の形を忠実に写し取ったもので、虫食いなど損傷の跡もよく再現されている。教官が注記・修正を加えた朱も残る。



東大寺文書影写本

写真が高価だった時代、どれもこれも制作するには、人手と時間と忍耐がいる。強い意志がなければ得難いものばかりだ。模型や模本は、研究と教育とを担う大学が生み出した、知的探究の副産物といえるだろう。

世の中便利になった。会期中、遺物の型をとって模型をつくるワークショップを計画しているが、当の遺物は3Dコピーで制作したレプリカを使う予定である。デジタルの恩恵に浴していることを十分に自覚しつつ、それでもあえて、手間暇かけて作られた模型や模本のもつ歴史資料としての価値に注意を喚起したい。そこには、そこから学びたい、真理に近づきたいという意志がある。制作の過程で様々な発見があり、理解や思考が深められたことだろう。コピー、レプリカとあなどることなかれ。多くの大学が持っているはずの模型や模本は、近代の大学という制度が生み出した作品であり、未来に残すべき貴重な文化財であるに違いない。こうした発見もあってか、開幕直前、いつになく気分が高揚している。

（総合博物館 教授 岩崎奈緒子）



西域絵画 観音菩薩図（模本）長谷川路可

参考文献：京都大学総合博物館図録『学問の礎を受け継ぐ－文科大学陳列館からの出発－』（2014年）

平成 26 年度特別展

「地の宝—百年を超える眠りからさめる旧制三高・京都帝大時代の
秘蔵鉱物コレクション」

会期：2014 年 10 月 29 日（水）～ 11 月 30 日（日）

総合博物館には、1869（明治 2）年設立の舎密局以来の伝統を持つ旧制第三高等学校や、1897（明治 30）年に創立された京都帝国大学理工科大学以来の資料が保存され、教育資料として、また研究標本として活用され、今に伝えられている。総合博物館では、数年前より独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・地質標本館の元館長である豊遙秋氏、京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室・下林典正教授、公益財団法人益富地学会館の藤原卓氏、石橋隆氏、京都薬科大学名誉教授桜井弘氏らの協力で、これら明治期の鉱物や鉱石標本の新たな整理に着手した。その結果世界的にも第一級のコレクションであることが明らかになり、100 年を超えてますます学術的な輝きを増したこれら秘蔵コレクションを展示し、博物館における鉱物標本のあり方を考えることを目的に本展示は企画された。

1886（明治 19）年に設立された第三高等学校が教育用に収集した鉱物標本コレクションは 2,600 点に達し、ラベルには島津製作所、吹田標本部、上野製作所、教育品製造合資会社、岩本鉱物販売所、金石舎などの名前がみられ、関西や関東の標本業者が広くその収集に協力したことが伺える。また、東京教育博物館、比企教授の名前の付されたものもある。また、世界的に有名なドイツのクラantz 社（Dr. F. Krantz in Bonn）の標本も 250 点含まれている。京都帝国大学理工科大学の鉱物・鉱石標本コレクションは、1898（明治 31）年に開設された採鉱冶金学科の鉱物標本室のために収集されたもので、主にわが国の地質学、鉱物学界の黎明期に鉱物標本室を作り上げた京都帝国大学理工科大学採鉱冶金学科採鉱学第三講座の初代教授比企忠氏の尽力による。その総点数は 25,000 点に達し、当時の著名鉱山に産出した鉱物、海外産の大型で質の高い鉱物標本からなり、現在もその全貌の調査が進行中である。展示場に展開されたこの二大コレクションは、来館者の感動を引きおこさずにはおかないと自負する。

鉱物の理解にはその結晶構造の解析が不可欠である。今からほぼ 100 年前に、ラウエらによって X 線が結晶により回折を起こすことが発見され（1912 年）、ブラッグ父子により X 線を用いて結晶構造を解析する方法が確立された（1913 年）。この功績により、1914 年にラ

ウエが、1915 年にブラッグ父子がノーベル物理学賞を受賞した。おりしも、今年 2014 年は、ラウエのノーベル賞受賞から 100 年目に当たり、近代結晶学の誕生 100 周年を記念して国連総会が宣言した「世界結晶年」である。そこで、本企画展では、結晶学発展の歴史を概観するとともに、結晶の理解を助けるために作られたクラantz 社製木製模型等も展示する。



山梨県 乙女鉱山産 水晶日本式双晶

さらに、元素周期表とともに、代表的な元素についてそれらを構成する元素が最初に抽出された鉱物や、あるいは特定の元素を含む鉱物を同時に展示している。さらに、旧制三高や京都帝大創成期と同時代を生き、鉱物愛好家、地質・鉱物研究者としても知られる宮沢賢治の作品中に取り上げられた鉱物や元素に付いても紹介して、元素についても親みをもってもらえるように工夫されている。

比企忠教授が停年の後、京都帝国大学理学部地質学鉱物学科の第一期生であった上治寅次郎氏（1890－1963）が助教授となった。上治は、講義はもちろん、大文字山や比叡山での実習や地質旅行など、学生の指導に積極的にあたった。本特別展で展示の手作りの「晶洞」模型からは、地質現象をわかりやすく伝えようとする上治の教育への情熱が伺える。

上治寅次郎氏は、1957（昭和 32）年に財団法人地下資源研究所を創設、地質学や鉱山学に貢献した。今回の特別展示は、財団法人の解散に伴い、ご子息の上治啓作氏より総合博物館に寄せられた基金によって実現した。仲介の労を執られたのは、上治寅次郎氏と同じ教室を創業された京都女子大学桂京造名誉教授である。

（総合博物館 教授 大野照文）

夏休み学習教室 体験 EXPO2014' 夏

2014 年 8 月 6 日（水）～ 8 月 10 日（日）

【学習教室概要】

2014 年 8 月 6 日（水）～ 9 日（土）（10 日（日）は台風 11 号接近による荒天のため中止）に「夏休み学習教室」を開催しました。「夏休み学習教室」は、主に小学校低学年から中学生を対象とした体験型学習プログラムを実施する夏休みの恒例イベントであり、毎年 8 月の第 2 週目に 5 日間実施しています。プログラムの内容は、大学教員による科学・技術、自然科学や歴史・文化に関する学習プログラムだけではなく、アーティストによる芸術系のワークショップ等多岐にわたり、参加者に五感を使って大学での学びを体験してもらう、また、本物に触れる機会を提供することを目的として実施しています。今年で 14 回目の開催となり、12 種類のプログラムに約 230 名が参加しました。本報告では、今年実施した 12 種類のプログラムの内、毎年恒例の人気プログラムの内の 1 種類と今年新たに実施されたプログラム 1 種類の合計 2 種類のプログラムを紹介します。

【プログラム紹介】

「電子顕微鏡で星の砂を調べよう」は野上裕生先生（京都女子大理事）と一田昌宏博士（京大総合博物館）による毎年恒例の人気プログラムの 1 つです。1 回の定員が 6 名と対応できる人数が少ないのですが、星の砂を含む砂の中から様々な生き物の殻を探し出して実際に参加者が光学顕微鏡と電子顕微鏡を使って観察をします。星の砂だけではなく、参加者が持参した試料を講師指導のもと、光学顕微鏡や電子顕微鏡を使って観察をしていました。



「身体で伝える、ほんとのことば！」は、京都大学出身のマイム・パフォーマー「上海太郎」さんが講師を務める 90 分間のパントマイムのワークショップです。今年初めて実施しました。参加した子ども達は、最初は戸惑っていましたが、10 分程すると少しずつ緊張がほぐれてきて身近な遊び（大縄跳び、かけっこ）のパントマイムを楽しんでいました。

【館園実習受講生による運営のサポート】

博物館の役割が資料の収集、保存だけではなく、教育活動についても重視するようになってきています。学芸員資格の取得を希望する学生が受講する「館園実習」の一環として、実習生と一緒に会場設営、参加者の受付、プログラムの進行補助をおこないました。実習生からは「子ども達が面白いと思う所と自分が面白いと思う所が違うのが新鮮だった」「プログラムを実施するのに裏でこんなに準備しているとは知らなかった。スタッフ側の体験ができたのが良かった」「子ども達の学ぶ意欲の高さに驚いた」など、今まではプログラムの参加者であることが多かった実習生が、プログラムを運営する側を体験したことで、将来、学芸員になった時に「参加者の立場に立ったプログラムづくり」にこの経験が生かされると考えています。

【最後に】

8 月 10 日（日）の最終日が、台風接近に伴う荒天のためプログラム中止という非常に中途半端な幕切れになってしまいましたが、プログラムを提供してくださった講師の先生方から「子ども達の熱心さと集中力の高さに驚いた」「子どもたちより自分の方が楽しんでしまった」「来年もぜひプログラムを実施したい」と参加者だけではなく、講師の先生方にとっても「学ぶ楽しさ」を再発見した夏休みになったのではないかと思います。最後になりましたが、学習教室にご参加いただいた皆様ならびにご協力いただいた皆様に感謝いたします。

（総合博物館 特定研究員 中川千種）

国際シンポジウム

第2回京都大学－国立台湾大学シンポジウム

2014年9月1日（月）・2日（火）

京都大学と国立台湾大学との共催による国際シンポジウム The 2nd Kyoto University & National Taiwan University Symposium が、2014年9月1日、2日の2日間にわたって京都大学で開催されました。両大学による国際シンポジウムは、昨年12月に台北市の台湾大学における第1回に続く開催となります。

シンポジウムでは14の平行セッションが行われましたが、総合博物館は今回も台湾大学博物館群との共催で、大学における教育研究において大学博物館が果たすべき主導的役割についてセッションを開催しました。コーディネイターは永益英敏 准教授（京都大学総合博物館）と陳雪華 教授（国立台湾大学図書館館長）です。台湾大学から13名、京都大学から30名の参加がありました。



セッションの様子

1日午後は、大野照文総合博物館長と陳雪華台湾大学図書館館長による開会挨拶に始まり、セッション Museum 1 では8件の口頭発表が行われました。このセッションでは収蔵資料の保管、教育、研究、展示など大学博物館の基本的機能について、さまざまな事例

が報告されました。2日午前のセッション2では両大学博物館の若いスタッフを中心に、大学博物館のアウトリーチ活動を主なテーマとして9件の口頭発表が行われました。また、期間中、総合博物館1階ロビーは20件のポスター発表の会場となりました。



ポスター会場の様子

2日午後（13時～15時）には他のセッションからの希望者も参加して総合博物館見学ツアーを行い、総合博物館のスタッフが、一般には公開していない収蔵室などのバックヤードも案内しました。

両大学の大学博物館は、これまでも数度にわたる合同シンポジウムを開催し、昨年には部局間学術交流協定を締結して協力関係の強化を図っています。今回のシンポジウムにおいても、今後も一層の協力関係を維持し大学博物館活動のさらなる発展を目指すことを確認しました。

（総合博物館 准教授 永益英敏）



参加者の集合写真

京都大学 SPIRITS プログラム

国際シンポジウム「挑戦するアジアの大学博物館」

2014 年 10 月 28 日（火）・29 日（水）

京都大学融合チーム研究プログラム（SPIRITS）の支援による、京都大学総合博物館主催の国際シンポジウム「Challenging Asian University Museums—elucidating the strategy to promote collection gaining and management and collection based research, education and outreach」が、2014 年 10 月 28 日と 29 日の 2 日間にわたって、京都大学時計台百周年記念館国際交流ホールで開催されました（表紙も参照）。

このシンポジウムには、韓国 ソウル大学 奎章閣（Kyujanggak）の Ingeol Kim 館長をはじめとする国内外からの招聘者 16 名と、総合博物館の 4 名、合計 18 名の演者を含むアジア 11 カ国 64 名が参加し、アジアの大学博物館の現状と今後の発展について、博物館コレクションの活用法に主軸を置いた議論がなされました。

初日にあたる 28 日は、10 月から本学総長に就任した山極壽一教授と総合博物館長 大野照文 教授による歓迎の挨拶に始まり、9 名の演者による各々の所属する博物館設立の経緯や現在の発展段階、博物館活動とその成果、そして大学博物館の今後より一層の発展を導くための具体的な方針や戦略等に関する発表が行われました。



山極総長による歓迎の挨拶

翌 29 日には、そうした博物館発展のためのコレクション活用について、新旧の活用法の紹介や意見発信がなされたほか、どうすれば博物館コレクションそのものの価値や影響力を増すことができるか等をテーマとした発表が行われました。また 1 日目、2 日目とも、プログラムの最後に、発表を行った演者らをパネリストとした総合討論の場が設けられました。そこでは当日の発表全体に関する意見交換や議論が行われたほか、他の博物館と比較して大学博物館ゆえの特色や利点は何か、また今後どうすればそれらを有効に活用しているかといったトピックが議題に上がり、パネリストや一般参加者から多くの発言が得られ、議論が尽きないまま盛況のうちに幕を下ろしました。また、本シンポジウムでは多くの若手研究者が、運営、講演、議論に関わったことにより未来へ向けて挑戦するシンポジウムとなりました。



総合討論の様子

また、シンポジウム翌日の 30 日午前には、シンポ参加者を対象とした博物館ツアーを開催しました。この日は、その前日に封切りされた当博物館の企画展「学問の礎を受け継ぐ—文科大学陳列館からの出発」と特別展「地の宝」の解説を中心に、展示室及び収蔵室の案内が行われました。

参加者の多くが、このシンポジウムと関連イベントを通じて、自身の所属機関そして大学博物館そのものあり方について、様々な視点から考え、意見を高めることができたのではないかと思います。

（総合博物館 博物館研究員 江頭幸士郎）

研究員紹介

妹尾裕介 博物館研究員

2014年4月1日着任，専門は考古学



今年4月に文化史の研究員として着任した妹尾裕介です。専門の研究分野は考古学・先史学で、これまで日本列島の農耕文化の成立をテーマに、器種の組み合わせに着目して縄文土器から弥生土器への移り変わりを追及してきました。現在は炊飯技術からみた弥生土器様式の成立の解明を目指して、当館所蔵の唐古遺跡出土土器資料の分析をしています。また海外の考古学にも関心をもち、とくに古代ローマ時代の東地中海レバント地方に興味があります。ローマ文化と在地文化が融合した、この地方独特の文化について研究しています。

考古学はモノ（考古資料）を通して、過去の人類行動の復元を試みる学問です。しかしモノから必要な情報を獲得するには考古学特有の方法論だけでは足りません。歴史学・民俗学・民族学・文化人類学・地理学・社会学など、多くの人文社会科学の知識が必要不可欠です。また、近年はモノだけでなく、人類活動にかかわる周辺環境も考古学の対象となってきました。そのため生物学・化学・物理学・地質学・土壌学といった自然科学の分析視点も求められます。

京都大学総合博物館は、文化史、自然史、技術史の豊富な資料・標本を収蔵しており各学問分野の研究者が日々研究しています。こうした多様な学問分野に触れる機会に恵まれた立場をうまく活かし、自身の研究を推進していきたいと思っています。

江頭幸士郎 博物館研究員

2014年4月1日着任，専門は動物学



カエルと聞いて、どれだけの種類を思い浮かべることができるだろうか？アマガエル、ヒキガエル…と、多くの人が何種類かはすぐに思い浮かべることができるのではないと思う。

では、実際日本にはカエルが何種いるのだろうか。現在、外部から持ち込まれた種を除いて、京都近辺で15、日本全体では43種・亜種のカエルが知られている。うち6種は、ここ数年に新しく名前が付けられた、一般に言うところの新種である。ただし、これらは決して新しく見つかった種というわけではなく、これまで別の種と混同されていたが、研究が進んだ結果独立した種であることが判明したものだ。学術的にはそれらを隠蔽種という。

私の研究は、こうした隠蔽種を探し出して名前を付けよう、というものである。例えばタゴガエルというカエルは、これまで東北から九州まで広く分布する単一の種とされてきた。しかし我々の研究により、実は複数の隠蔽種を含み、また日本の自然環境と強く関連して進化してきたカエルであることがわかった。こうした研究が進むことで、日本のカエルの種数は、今後増えていくだろう。

日本のように研究の進んだ地域でさえこういう状態であるから、例えば熱帯域の密林を調べれば、多くの（文字通りの）新種と、それ以上の数の隠蔽種が存在すると予想される。私はこれまで主に国内の種を研究対象としてきたが、今後はその中で培ってきた研究技術を生かしつつ、より生物多様性の高い東南アジア地域へと研究を展開していくつもりである。

研究員紹介

古勝 亮 博物館研究員

2014年4月1日着任，専門は地理学



総合博物館地理学所蔵資料の管理と整理，閲覧や貸し出し等の対応のほか，博物館で開催されるシンポジウムの準備とお手伝いなどを行っています。これまでに，20世紀初頭のヨーロッパ製ステレオスコープのスライドの整理や，台湾の蘭嶼ヤミ族のチヌリクラン（木製船）模型をはじめとする民族資料の整理と調査をしてきました。後者については，教務補佐員の山本浩史氏とともに，5月の分野間合同研究発表会と9月の京大台湾大シンポジウムで，研究発表の機会を与えていただきました。チヌリクラン模型は，大学ミュージアム連携や総合博物館での企画展「学問の礎を受け継ぐ」にも展示されることになり，うれしく思っています。

当館地理資料部門に収蔵されている資料は，古地図，地球儀，外邦図をはじめ，民族資料，理化学機器，写真やスライドなど多岐にわたります。私の専門は中国の中世思想史の研究ですが，博物館での仕事は，モノ資料と文献資料の複合的アプローチと，地理学のみならず歴史学・民族学・文化史などの多角的な視野が必要とされ，他分野との交流も多く，とても貴重な経験です。

大野館長をはじめ博物館の先生方からは，大学や研究者のあり方について啓蒙され，また同世代の研究員との交流からも刺激を受けています。これからも，博物館地理資料部門の仕事を通じて，新しいこと面白いことを発見していきたいと思います。

中川千種 特定研究員

2014年5月1日着任，専門は博物館科学



2014年5月1日から特定研究員として総合博物館でお世話になっています。

私は，学部は近畿大学農学部水産学科に所属しており，在学中に「大学で学んでいることで，少しでも世の中の役に立てるといいな」という思いから水族館の解説ボランティアを始めました。ボランティア活動を通して『博物館での学び』の楽しさ」と『博物館を介して多様な人と出会う』面白さ』を体感し，博物館の世界にハマってしまいました。

大学卒業後は京都大学大学院情報学研究科に進学し，総合博物館をフィールドにして「携帯端末機を用いた博物館での学び」や「博学連携事業（主に小学校）」に取り組んでいます。また，大学院生を中心とした対話型解説イベント「京都大学子ども博物館」の運営や「夏休み学習教室」をはじめとする学習プログラムの実施やイベント開催のサポートをしています。現在は，これらの活動に加え2015年2月11日から開催する企画展「医は意なり一命をまもる知のあゆみー」の学芸業務を担当しています。今まで全く関わりのなかった「医学史」という未知の分野にやや戸惑いつつも展示委員の先生方にご指導をいただき，また，周りの方々に助けていただきながら展示準備を進めています。

来館された方が「笑顔になれる」博物館を目指して，私自身が楽しみながら1つ1つの仕事を丁寧に日々努めていきたいと思っています。

日本学術振興会研究拠点形成事業「アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク拠点」

アジア 4 カ国の若手研究者を招へい

2014 年 10 月 19 日（日）～ 11 月 11 日（火）

総合博物館が進める日本学術振興会の研究拠点形成事業により、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアの脊椎動物種多様性に関わる若手研究者 4 名を 2～3 週間、京都大学に招へいし、共同研究や学術交流の実践の場を通じて、京都大学の若手研究者とともに研究力の向上とアジア多国間ネットワークの形成を行いました。10 月 20～24 日は、京都大学 SPIRITS 事業により招へいた 1 名を含むベトナム研究者 2 名と日本の若手研究者 5 名が、総合博物館の本川雅治准教授とともに、長野県伊那市の信州大学西駒ステーションにおいて哺乳類の野外調査を行いました。700～2,100 メートルと多様な標高域での調査により、標高による分布種の違いや、研究データの収集などについて若手研究者同士で協力しながら、技能向上をはかりました。また、脊椎動物研究の重要な研究機関である京都大学霊長類研究所と日本モンキーセンターに 10 月 24・25 日に訪れ、学術交流を行いました。



また、本事業が目指す研究者、標本、情報を一体的に捉えたアジアネットワーク形成と密接に関わる内容の、10 月 28・29 日の SPIRITS 事業による国際シンポ

ジウム「挑戦するアジアの大学博物館」にも参加し、積極的な議論を展開しました。31 日には、本事業によるアジア脊椎動物種多様性研究国際セミナーを総合博物館で、若手研究者の企画・運営により実施しました。そこでは、伊藤真（京都大学）、Hoang Trung Thanh（ハノイ国家自然科学大学）、Nguyen Lan Hung Son（ハノイ国家師範大学）、Bui Tuan Hai（ベトナム国立自然博物館）、齊藤浩明（京都大学）、Awal Riyanto（インドネシア科学院ボゴール動物博物館）、Wichase Khonsue（チュラロンコン大学）、Daicus Anak Belabut（マラヤ大学）の 8 名（下の写真の左から右の順）が哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類に関する研究発表を行い、活発な質疑応答と議論が展開されました。コメンテーターとして参加したソウル大学の木村順平教授による発表者や参加者に対する厳しく、同時に将来の若手研究者の発展を期待する暖かいコメントにより 6 カ国からの参加者によるセミナーは終了しました。

このほか、総合博物館、理学研究科、人間・環境学研究科での共同研究の実施、日本爬虫両棲類学会大会の参加と研究発表、国立科学博物館での標本調査と研究交流など、本事業と SPIRITS 事業により同時期にアジアの若手研究者を招へいし、2 国間ではなく、多国間研究交流が進められました。招へい研究者、日本の研究者いずれも大きく飛躍する機会になりました。

（総合博物館 准教授 本川雅治）



司会の森山純
（京都大学）と
コメンテーターの
木村順平教授



国際セミナーで研究発表をした 8 名の若手研究者

研究資源アーカイブ通信

2014年4月

京都大学デジタルアーカイブシステム Peek 研究者モード公開。
映像ステーション映像コンテンツ学内貸出開始。（講義・行事等
利用，映像ステーション受付にて。）

2014年6月

5日，映像ステーションにて講演会・座談会「学術資料・学術活
動の映像記録とその活用ーメディアの発展をふまえてー」を開催。
30日，研究資源化プロジェクト公募開始。（平成27年度実施分・
公募外受入；9月26日まで，のち10月9日まで延長。）

2014年7月

1日，（全学）研究資源アーカイブ運営委員会（第8回）開催。
25日，映像ステーションにて工学研究科建築学専攻所蔵ナイト
レート映画フィルム「大正十二年九月 実写 関東地方大震災」復
元デジタル映像上映会・勉強会開催。（建築学専攻・建築系図書室，
総合博物館との共催。）

2014年8月

6日，映像ステーションにて天文台アーカイブプロジェクト報告
会開催。

（総合博物館 講師 五島敏芳）

総合博物館日誌（平成26年7月～10月）

展示

- 7月3日（水）～8月24日（日） 特別展 貝原益軒没後三百年記念「学ぶ楽しみを多くの人にー益軒と京書肆柳枝軒」
- 8月9日（土） 特別展 貝原益軒没後三百年記念 関連企画
講演「益軒と柳枝軒ーもう一つの書物文化の誕生ー」横田冬彦（文学研究科・教授）
講演「この展覧会のみどころ」横山俊夫（京都大学名誉教授・滋賀大学理事）
- 8月16日（土）・23日（土） 特別展 貝原益軒没後三百年記念 関連企画
ギャラリートーク 研究者による展示の解説 横山俊夫（京都大学名誉教授・滋賀大学理事），
岩崎奈緒子（総合博物館・教授）
- 9月3日（水）～10月19日（日） 特別展「明月記と最新宇宙像」
- 9月28日（日） 特別展「明月記と最新宇宙像」 関連企画
講演「明月記と藤原定家」冷泉為人
講演「明月記の超新星記録」小山勝二（京都大学名誉教授）
講演「オールトと明月記」佐藤文隆（京都大学名誉教授）
講演「最新宇宙像と京大岡山3.8m望遠鏡」長田哲也（理学研究科・教授）
講演「アマチュア天文家，射場保昭」竹本修三（京都大学名誉教授）
対談「日本のスペース研究のパイオニア」松本紘（総長）×大野照文（総合博物館長）×
柴田一成（理学研究科附属天文台長）
- 9月6・7・13・14日・10月4・5・11・12・18・19日 特別展「明月記と最新宇宙像」 関連企画（1日5回）
4次元デジタル宇宙シアター ～宇宙旅行の気分を味わってみませんか？～
青木成一郎（花山天文台）
- 9月6・7・13・14・20・21日・10月4・5・11・12・18・19日 特別展「明月記と最新宇宙像」 関連企画（1日3回）
学生展示解説ガイド
- 9月24日（水）～28日（日） 期間限定展示「手にとる宇宙」
- 9月28日（日） 期間限定展示「手にとる宇宙」 関連ワークショップ
「手にとる宇宙」
- 10月29日（水）～11月30日（日） 平成26年度企画展「学問の礎を受け継ぐー文科大学陳列館からの出発」
- 10月29日（水）～11月30日（日） 平成26年度特別展「地の宝ー百年を越える眠りからさめる旧制三高・京都帝大時代の秘蔵鉱物コレクション」

イベント

- 7月5・6・12・13・19・20・23日 ランビルの吊り橋を歩こう !!
- 7月25日（金） 京都千年天文学街道・第16回アストロトーク
講演「太陽フレアと宇宙生命」野上大作（花山天文台）
4次元宇宙シアター「3Dで見る宇宙のすがた～月のおはなし～」青木成一郎（花山天文台）
- 8月7日（木）・8日（金） オープンキャンパス2014「知が救うべきことを知る」
- 9月1日（月）・2日（火） 国際シンポジウム「第2回京都大学ー国立台湾大学シンポジウム」
- 9月21日（日） 土器づくりイベント「考古学者になろうー土器づくりからみた昔のくらしー」
曾根 茂（画家）・中塚 良（向日市埋蔵文化センター）

10月25日(土)	京都千年天文学街道・第17回アストロトーク 講演「超新星の科学」小山勝二(京都大学名誉教授) 4次元宇宙シアター「3Dで見る宇宙のすがた～土星のおはなし～」青木成一郎(花山天文台)
10月28日(火)・29日(水)	京都大学 SPIRITS プログラム 国際シンポジウム「挑戦するアジアの大学博物館」
10月31日(金)	日本学術振興会研究拠点形成事業 アジア脊椎動物種多様性研究国際セミナー

夏休み学習教室 体験 EXPO 2014' 夏

8月6日(水)	NO.1	子どもアロマ教室	桜井 弘(元素周期表同好会・京都薬科大学名誉教授)
8月6日(水)	NO.2	望遠鏡を作って星や月を観察しよう+大人のための学習教室「貝体新書」	川上紳一(岐阜大学教育学部)・大野照文(総合博物館長)
8月7日(木)	NO.3	元素博士ジュニアになろう!～えれめんトランプをしながら元素を知ろう～	桜井 弘(元素周期表同好会・京都薬科大学名誉教授)
8月7日(木)	NO.4	触って立体をしらべる	小原二三夫(日本ライトハウス情報文化センター)・楠本由美子
8月8日(金)	NO.5	知っていますか、放射線	秋津 裕(エネルギー科学研究科)・内海博司((公財)体質研究会・京都大学名誉教授)
8月8日(金)	NO.6	4次元デジタル宇宙シアターで宇宙を3Dで体感しよう!	青木成一郎(花山天文台)
8月8日(金)	NO.7	電子顕微鏡で星の砂を調べよう	野上裕生(京都女子大学理事)・一田昌宏(総合博物館)
8月9日(土)	NO.8	遊ぼう!学ぼう!君も静電気博士になろう!	平島和雄(京都教育大学附属桃山小学校)・K-PROJECT
8月9日(土)	NO.9	身体で伝える、ほんとのことば!	上海太郎(マイム・パフォーマー(京大卒))
8月9日(土)	NO.10	分光つつでつくってみる省エネ電球の不思議	川村康文(東京理科大学理学部物理学科)
8月9日(土)	NO.14	子ども博物館(夏休みスペシャル)	京都大学子ども博物館プロジェクトチーム
8月10日(日)	NO.11	三葉虫を調べよう	大野照文(総合博物館長)
8月10日(日)	NO.12	3次元, 4次元で遊ぼう	立木秀樹(人間・環境学研究科)
8月10日(日)	NO.13	船のペーパークラフトをつくってみよう	斎藤義朗(長崎県文化振興課・主任学芸員)

レクチャーシリーズ

7月12日(土)	第127回	日露戦争と西陣―明治の失業者救済をめぐる―	秋元せき(京都市立歴史資料館・研究員)
9月13日(土)	第128回	説話を通して奈良時代の社会を考える	鷲森浩幸(帝塚山大学文学部)

博物館セミナー

7月11日(金)	第64回	世界文化遺産登録を目指す 百舌鳥・古市古墳群と「倭の五王」の時代	阪口英毅(文学研究科・助教)
10月10日(金)	第65回	探究と創造の始まりーアメリカ美術館教育活動の現場からー	渡川智子(教育学研究科・修士課程)

入館者数

15,261名 (うち特別観覧 81団体 8,066名)

発行日 2014年11月17日
 編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>